

# Jugend Philharmoniker 19

2025.3.8

MUZA Kawasaki Symphony Hall

**j u g e n d**  
philharmoniker

## ごあいさつ

本日は、ユーゲント・フィルハーモニカ第一回定期演奏会にご来場いただき誠にありがとうございます。

我々趣味で楽しんでいるアマチュアオーケストラの世界にも悩みの種がいくつかあります。どの楽団も共通で抱えている問題は「楽団の高齢化」という問題ではないでしょうか。我々の楽団もドイツ語で「青少年」という意味を持つ“ユーゲント”という名前を冠してはいますが、創立してから20年近い時が経ち、創立メンバーは40歳を超え、お子さんが産まれて楽団を休団するメンバーも増えてきました。そんな中でも当団のルーツである全日本高等学校オーケストラ連盟との繋がりを生かし、高校卒業後の大学生の子達や大学オケを引退したばかりの若い世代の子達のリクルートに努め、現在は現役の大学生から創立当初の古参メンバーまで、幅広い世代の団員が所属するまでになりました。

オーケストラの持続可能性という意味では若い世代に入団してもらうことや団員の新陳代謝が不可欠な一方で、団員が年齢を重ねていくことは必ずしも悪いことばかりではないようです。特にクラシックの世界では10代、20代の頃には全く想像もできないような深遠な世界が広がっています。特に今回演奏するマーラーの後期作品はそれを象徴するような作品を感じます。私自身も高校生、大学生の頃はマーラーの支離滅裂な音楽に良さを全く見出すことができず、モーツアルトやベートーヴェンといったわかりやすい（と言ったら怒られるかもしれませんが……）音楽ばかりを聴いていました。不思議なことに、人間の好みは歳をとるごとに大きく変わっていき、30歳を超えた今ではマーラーは私の大好きな作曲家のひとりとなりました。オーケストラでも、人生経験を多く積んだ指揮者、奏者の奏でる音楽は曲への深い理解や説得力があるように感じます。団員の年齢層が広がっていくことはある意味「楽団の成長」と言えるのではないかと思います。

さて、今回取り上げるマーラーの交響曲第9番は当団としては11年ぶり、2回目の挑戦となります。11年前に比べて団員の年齢層は広がりましたが、果たして楽団としてどれだけ成長を遂げることができたのか、どうぞご期待ください。そして、指揮者の田中一嘉先生とは9年ぶり4回目の共演です。長年の信頼関係を築いている田中先生とユーゲント・フィルの化学反応をぜひ楽しんでいただけたら幸いです。

最後になりましたが、田中先生をはじめ、本演奏会の開催にあたってご協力いただきました皆様、そしてご来場いただきました皆様に、心からの御礼を申し上げます。来年で20周年という節目を迎える当団ですが、今後とも当団の活動に対して引き続きのご期待と変わらぬご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願ひいたします。

ユーゲント・フィルハーモニカ代表 三宅雅也

# ユーゲント・フィルハーモニカー

## 第19回 定期演奏会

2025年3月8日(土) 13:15開場 14:00開演

ミューザ川崎シンフォニーホール

---

### プログラム

#### G.マーラー：交響曲第9番 ニ長調

G.Mahler : Symphony No.9 in D-major

指揮=田中一嘉

演奏中は携帯電話の電源をお切りください。

演奏中のお席の移動はご遠慮ください。

カーテンコールのみ撮影いただけますが、周りのお客様のご迷惑とならないようご注意ください。



指揮 田中一嘉

東京生まれ。桐朋学園大学音楽学部卒業。指揮を故斎藤秀雄、小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明の各氏に師事。コントラバスを江口朝彦、堤俊作の両氏に師事する。在学中より同大オーケストラ定期演奏会、オペラ公演等を指揮し、故斎藤秀雄、森正、秋山和慶の各氏、及びプローダス・アール氏、河野俊達氏、フランコ・フェラーラ氏らの指導を受ける。学外では、藤原歌劇団、東京アカデミー合唱団指揮者として、数多くのオペラ、宗教音楽分野での実績を積む。1976年、大学在学中に第4回民音指揮者コンクール（現東京国際音楽コンクール〈指揮〉）入選。奨励賞

受賞。卒業後、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団指揮者、群馬交響楽団指揮者を歴任。これまでに東京交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、札幌交響楽団、九州交響楽団、千葉交響楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢等、日本の主要オーケストラを指揮する。1992年にはヤナーチェク春の国際音楽祭（チェコ・オストラヴァ）にてヨーロッパデビュー。1995年にはカルロビ・ヴァリ交響楽団を指揮。2000年ドイツ・ロットヴァイル夏の音楽祭、2001年ベルリン日本週間での公演、2003年ウィーン・ムジークフェラインザールでの日墳合同第九演奏会等を指揮。教育方面では作陽音楽大学（現くらしき作陽大学）、昭和音楽大学・大学院の非常勤講師として長年、後進の指導に力を注ぐ。また、日本各地のジュニアオーケストラの指導、指揮など、その活動は多岐に及んでいる。公益財団法人千葉交響楽団の特別支援学校への移動音楽教室の指揮、また30年以上にわたり全国聾学校合奏コンクール（公益財団聴覚障害者教育福祉協会主催）の審査委員を務めるなど福祉教育にも積極的に取り組んでいる。

### ユーゲント・フィルハーモニカー

一般財団法人日本青年館と全日本高等学校オーケストラ連盟の音楽行事（全国高等学校選抜オーケストラフェスタ、全日本高等学校選抜オーケストラ・ヨーロッパ公演、日本ユングオーケストラ・ヨーロッパ公演）に参加したメンバーが中心となって2006年3月に創設された。全国各地の高校や大学オーケストラ出身のプレイヤー約80名が集まり、3月の定期演奏会を中心に、福祉施設や普段生のオーケストラに触れる機会のない農村への訪問演奏、地方公演、行楽施設の各種イベントやテレビ番組での依頼演奏など幅広い活動を行っている。音楽的に、そして人間的に成熟した団体作りに励みながら、「アマチュア・オケだからできること（＝プロオケには出来ないこと）」を追求している。

# 曲紹介

この解説文を書くにあたり、グスタフ・マーラー（1860～1891）の伝記や評論を見返してみました。どの文献にも、彼の最高傑作として、本日演奏する交響曲第9番が挙げられていました。21歳で指揮者デビューし、厳格な稽古と完成度の高い演奏であれよあれよという間に世に現れ、わずか37歳で最高峰のウィーン宮廷歌劇場の監督にまで上り詰めたマーラー。シーズンオフの夏季休暇中、妻子を放置して山小屋に籠り一気呵成に交響曲を作曲し続けたマーラー。その地位に飽き足らず48歳で新天地アメリカ、ニューヨークに活動の場所を広げたマーラー。一生ワーカホリックだったマーラーが49歳で書いた作品、それがこの交響曲第9番であり、また最後に完成させた作品となりました。「マーラーは自身の寿命がそう長く無いことを悟り、この交響曲を書いた」というイメージは未亡人アルマが脚色して広めたもので、マーラー本人は指揮も作曲も意欲的に活動をこなす気満々だったようです。後世の音楽ファンにとってもそうですが、51歳で急死したマーラーが誰よりも無念だったことでしょう。

古参のマーラーファンはもはや多くを語らず、4楽章の最後に指示された「死に絶えるように」という音楽用語を口にするだけで興奮のあまり気絶するらしいですが、しかし筆者はそうした興奮より、むしろ、ある団員がぼやいた「この曲はどこに共感すればいいか分から……」という当惑や、前回のマラ9を聴きにきた知り合いの「何が何だか分から……」といふ素直な感想を積極的に支持したく思います。「やっぱりクラシックは難しいなあ」と肩を落とす前に、ご理解頂きたい事がございます。

マーラーが己の精神面を音楽に託すにあたり、最重要視した作曲技法は“対位法”でした。現代人が鑑賞する音楽は、主体となるメロディーに対して伴奏がつく、というタイプが多いかと思います。対位法はそれと異なり、複数のメロディーが同時進行します。つまり主役が何人もいるんですね。皆さんも会議で、役員、部長、課長、取引先の偉い人、が同時進行で違う意見を主張したことありますよね？あんな感じです。しつちやかめっちゃかで終了する会議も多い訳ですが、そこは取りまとめの達人マーラー。きちんとそれぞれのメロディーを盛り立てて、クライマックスで足並みが揃うよう音楽を作っております。聴き惚れるような主役を崇め奉る推し活ではなく、クセある登場人物が一斉に出てくる群像劇であり、各自の躍動を器用に終幕に持っていく、その“経過の巧みさ”にこそ、本作品の深い味わいがございます。

この交響曲を鑑賞するにあたり、手引きとしたいモチーフを2つ挙げます。

## 【ため息のモチーフ】



「ファ#～ミ～」等、下行する音の型です。開始30秒ほどで、2ndヴァイオリンが奏でます。俗に「ため息のモチーフ」と呼ばれています。マーラーの他の作品でも頻出しています。1楽章と2楽章

でよく用いられています。

## 【愛と安らぎのモチーフ】



「ミレドレ」等、廻り巡る音の型です。マーラーのみならず、ワーグナーなどあらゆる作曲家が、男女の昂りを表現する際に用いた一種の定番モチーフです。3楽章の中間でトランペットが高らかに演奏しますし、4楽章でも登場します。

ため息をつきながら愛による安らぎを求めていく。これが本作品に通底するモチーフで、ともすると、人生自体がその連続なのでしょうね。

以下、各楽章の詳細となります。

## 第1楽章 アンダンテ・コモド

ニ長調。ソナタ「っぽい」形式。「っぽい」と表現したのは、この楽章にはこれまでの交響曲が踏襲してきた明確な形式の姿が認められないからです。心臓の鼓動のようなチェロとホルン、ハープの鐘が鳴るような響きに導かれ、先述の「ため息のモチーフ」がヴァイオリンに登場します。その他にも細かなモチーフが積み重なり、いくつもの複雑な旋律に発展しながら同時進行し、極限の対位法ともいいうべき音楽が展開されます。

一度クライマックスが築かれると、ティンパニのトレモロに導かれて冒頭の鼓動のモチーフが帰ります。その後、ファンファーレ風の新しいモチーフがトランペットによって導かれます。やはりいくつもの旋律が絡み合って音楽が発展し、再び、冒頭の鼓動のモチーフがトロンボーンに現れます。更に、冒頭でハープが奏した鐘の鳴るような響きが、実際の鐘に引き継がれると、そこからマーラーが得意とする葬送行進曲風味の音楽が進行します。

フルート、ホルン、チェロやホルンがそれぞれ名人芸を披露するも、やはり同時進行するこれらの旋律はもはや空く響き、これまで登場したモチーフがほぼ空中分解します。楽章の最後、ようやく形を取り戻したため息のモチーフが再登場し、ピッコロとチェロの高音域の音が最後まで残って消えていきます。

この楽章は、モチーフも形式も一見支離滅裂なようでいて、聴き終わってみると、全ての音楽の展開が必然性を持ち、説得力を持って迫ってくるような、不思議な魅力に溢れています。

## 第2楽章 ゆったりとしたレントラーのテンポで、いくぶんぎこちなく、大いに粗野に

レントラーはワルツが台頭する以前の舞曲です。マーラーは敢えてこの舞曲を用いる事で、都会的に洗練されていない、ある意味では野暮ったく、ある意味ではどこか懐かしい雰囲気を作り出そ

うとしています。

この楽章は以下の3種類の音楽を用いています。

A：ハ長調。ユーモア溢れる、しかしどこか取り繕っているかのようなテーマ。一見素朴なようで、ホルンのゲシュトップ、コントラファゴットの強奏などの音響を混ぜ込む皮肉さもある。

B：ホ長調。ホ長調はA主題のハ長調から「遠い」と見做される調性です。AからBに移った事で、徐々に音楽が変化したというより、激変したような印象を与えます。Aよりテンポも早く、やや狂乱の踊り、といった趣があります。

C：ヘ長調。ヘ長調はA主題のハ長調に「近い」と見做される長性です。またB主題からは「めっちゃ遠い」調性です。テンポもゆったりとしていて、ホルンとファゴットを中心としてのんびりとした雰囲気が漂います。

このABCの舞曲が相互に入れ替わり、立ち替わりながら音楽が展開します。最後は、最も高い音域を担当するピッコロと、最も低い音域を担当するコントラファゴットが楽章を締めくくります。

### 第3楽章 ロンド・ブルレスケ アレグロ・アッサイ、極めて反抗的に

イ短調。どこか厭世的で達観している他の楽章とは異なり、この楽章は嵐のように荒々しく、激しい音楽が終始展開されます。

トランペットとホルンの不気味なファンファーレ、それに呼応するオーケストラ。短い序奏の後、不気味なロンド主題が勢いよく飛び出します。1楽章で勇壮な葬送行進曲として聴こえてきた金管楽器も、2楽章でおどけた雰囲気を湛えた木管楽器も、このロンド主題で不気味で騒々しい音を鳴らし続けます。

ロンド主題が小康状態に入り、音楽が休止しそうなタイミングで、突如別のモチーフが響き渡ります。「愛と安らぎのモチーフ」ともいいくべき、ミレドレーと音程が回転するモチーフです。天国的で輝かしく、俗世離れし、浮遊した空気感になっています。その瞬間的な安らぎの後、再びロンド主題に戻ると、テンポも上がり、加速度的に凶暴性を増しながら終息を迎えます。

相変わらず、特定の主題を全面に出すというよりは、複数の主題をこれでもかといいくらいに同時に進行させていくので、オーケストラの全楽器に非情な演奏技術が要求されます。一度入るタイミングを間違えたら、もうアンサンブルに戻れません。そもそも崩壊手前に近いバランスで書かれている楽曲を、崩壊させずに成立させずに演奏し切る芸当は、音楽としても職人技の集まりとしても大変な聴き応えがあります。

### 第4楽章 アダージョ

マラ9をマラ9たらしめている楽章です。

本楽章で用いられる変ニ長調は、1楽章のニ長調に対し半音低い調、音楽理論的に言うと「圧倒的に遠い調」です。冒頭よりも一段トーンダウンした調で最後を締めくくる構成になっていることも、別れや諦めの境地を想起させます。

3楽章の中間部で大々的に登場した「愛と安らぎのモチーフ」による転回音型が、序奏およびそ

れに続く主題の中に組み込まれています。いわばこの主題のための伏線だった訳です。

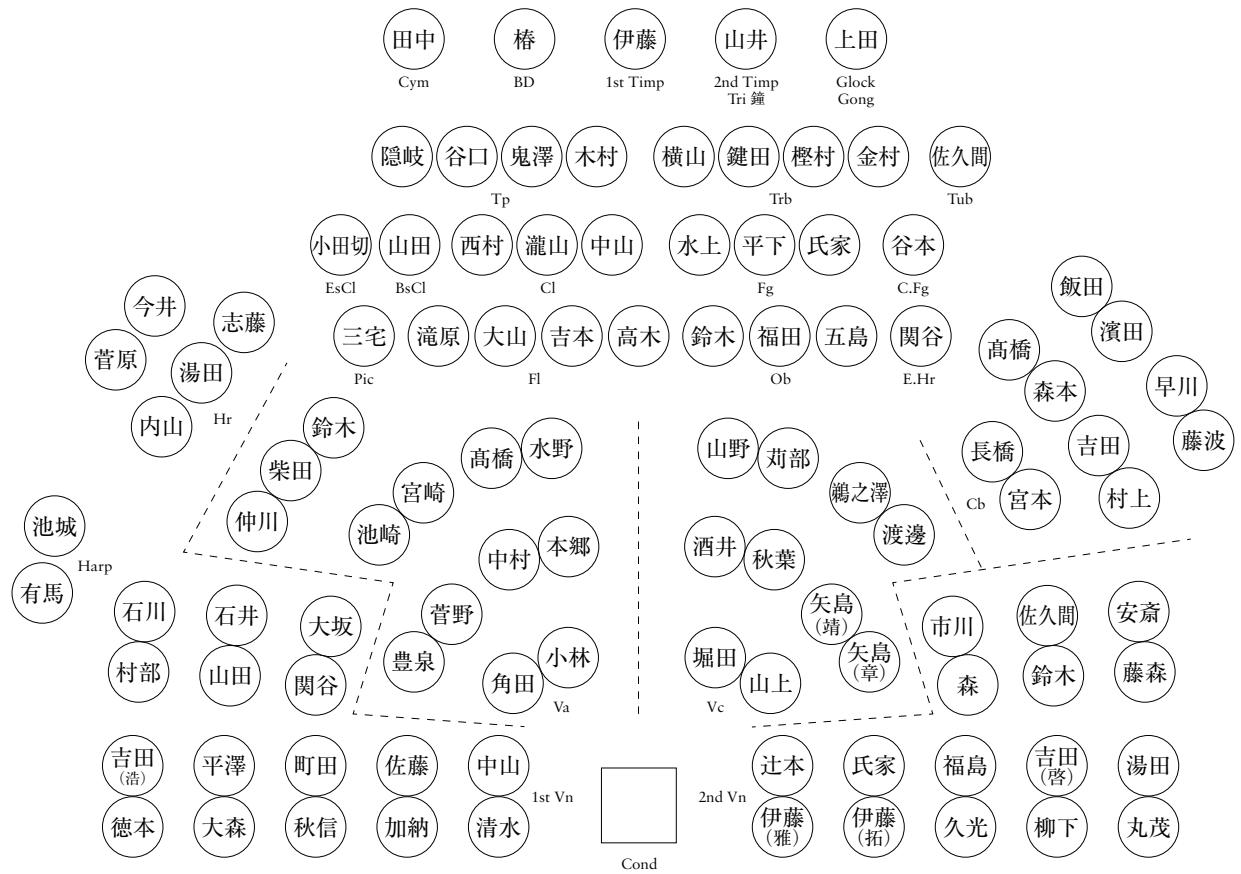
主題が雄大な提示に対しファゴットが朴訥と音階を鳴らす、この行程が繰り返された後、主題そのものが徐々に変形しながら進みます。本楽章はテンポが極めて遅いため、一つ一つの音がより明瞭に聴き取れるはずです。そのため息継ぎが必要な管楽器は勿論ですが、弦楽器も音を伸ばすために弓を最大限効果的に使う必要があり、3楽章とは異なる意味で神経を使います。

やがてハープを中心として、やはり朴訥とした音の並びが登場すると、「愛と安らぎのモチーフ」が拡大発展し、音量的には最後のクライマックスを築きます。オーケストラの強奏が一通り鳴らし終わると、アダージッシモ、より遅いテンポで楽曲が収束に向かいます。管楽器も打楽器ももはや登場せず、最終的にはコントラバスさえいない弦楽が奏でられます。スコアのわずか1ページ半のこの最終箇所が、およそ5分以上続きます。静寂の中を搖蕩うように進みながら、終わりそうで終わらない音楽が、ようやく辿り着いた最後の小節、変ニ長調の主和音。そこにはかの有名な音楽用語“ersterbend”「死に絶えるように」が記載されており、さまざまな逡巡を経てようやくこの交響曲は納得した安息の時を迎えるのです。

さてユーベント・フィルハーモニカーの定期演奏会も19回を迎え、それは設立19年目を迎える事と同義なのですが、19年も経過すると団員にも色々な人生の局面があったもんだ、あるいは現在進行形であるもんだ、と感慨深くなります。設立当時に大学生としてヤンチャしていた団員も今や立派な古株として新規団員を見守る立場になっております。また、各々の仕事や家庭にも様々な変化が起こっています。人生の一部をユーベント団員として過ごしている我々と、その演奏を聴きに来て頂いた皆々様の、数百数千の日常が、過去と未来を抜きにして、今このひととき、コンサートホールで一様に交わっているのでございます。生や死など、芸術的な美辞麗句をこの傑作の前に並び立ててもいいのですが、そんな遠い理念より、もっと身近な感慨、つまり「人生、僕いな～」とも言うべき感慨を、コンサートホールに集まった皆で味わう事。マーラーがこの交響曲に託した境地は、意外とそんな、平穏な日常の一コマだったかもしれない、筆者は思うのです。生涯にわたり、歌劇場の内外で音楽的闘争に明け暮れたマーラーが、遂に手に入れられなかったもの、それは平穏な日常だった訳ですから……。

近藤圭（元団員・思想家）

## ステージ配置図



## 出演者

Violin	Viola	宮本貴幸 ○	志藤 豪 ◇
秋信有花	池崎功汰	村上慶乃介	菅原匡子
安斎拓志	菅野実菜歩	森本峻世	湯田怜央奈
石井千星	小林賢人	吉田颯人	
石川律	柴田淳志		Trumpet
市川徹	鈴木千奈	Flute	隱岐麻美
伊藤拓也 ○	高橋熙	大山司	鬼澤大地
伊藤雅也	角田拓也 ○	高木捷	木村沙織
氏家夏子	豊泉友里絵	滝原真琴	谷口真優
大坂純蓮	仲川咲	三宅雅也 ◇	
大森華希	中村芳弘	吉本奈美	Trombone
加納千裕	本郷一真		鍵田潤一郎
佐久間椋子	水野哲志	Oboe	樺村雄太
佐藤直人	宮崎春菜	五島 穂	金村優祐
清水貴則 ☆		鈴木 瞭	横山桃花
鈴木紗羅	Violoncello	関谷麻衣	
関谷利温	秋葉涼太	福田有花	Tuba
辻本茉里奈	鵜之澤航平		佐久間 直
徳本堯久	苅部千紘	Clarinet	
中山麻友	酒井嶮甫	小田切広洋	Percussion
久光幹太	堀田樹乃	瀧山早貴	伊藤 瞳
平澤卓也	矢島章正	中山哲兵	田中浩平
福島宏章	矢島靖子	西村 慧	山井千夏
藤森智代	山上十和 ○	山田 慧	上田祥太朗 (賛助)
町田宗谷	山野菜多里		椿 康太郎 (賛助)
丸茂友里	渡邊佳晶	Bassoon	
村部一星		氏家秀徳	Harp
森勇人	Contrabass	谷本浩一	有馬律子 (賛助)
柳下裕俊	飯田保瑛	平下惠梨	池城菜香 (賛助)
山田佳歩	高橋龍太郎	水上翔多	
湯田茜音	長橋花織		
吉田啓悟	濱田洋輔	Horn	☆=コンサートマスター ○=パートリーダー ◇=インスペクター
吉田浩美	早川拓実	今井雪乃	
	藤波梓	内山萌美	

### アンケートのお願い

本日は、私どもの演奏会にご来場いただき誠にありがとうございました。

今後の演奏活動の参考にさせていただきますので、

皆様のご意見・ご感想をお聞かせください。

QRコードまたは下記のURLよりアクセスいただき、ご回答ください。



<https://x.gd/jugendphil19th>

\*後日ご案内をお送りしますので、アンケートにご連絡先をご記入ください。

### 今後の演奏会

第5回特別演奏会（創立20周年記念シリーズ1）

J.ブラームス：交響曲第1番 ハ短調 Op.68

J.ブラームス：交響曲第2番 ニ長調 Op.73

指揮＝田中一嘉

2025年7月6日（日）夜公演

ミューザ川崎シンフォニーホール

第20回記念定期演奏会（創立20周年記念シリーズ2）

J.ブラームス：交響曲第3番 へ長調 Op.90

J.ブラームス：交響曲第4番 ホ短調 Op.98

指揮＝田中一嘉

2026年3月15日（日）昼公演

ミューザ川崎シンフォニーホール

<http://jugend-phil.com>

Twitter @jugend\_phil

Facebook www.facebook.com/jugendphil

Instagram @jugend\_phil

YouTube www.youtube.com/user/jugendphil

チラシを持ち帰らずとも、今後の演奏会情報が

スマホで確認できるようになりました！



演奏会の概要



演奏曲の試聴

アクセスはこちらから！



チラシ画像



プロモーション動画



楽団からの  
メッセージ



楽団のWebサイト  
SNS

スマホのカメラを起動し、こちらのQR  
コードにカメラをかざしてください